Reio Associated Reposit	ory of Academic resouces					
Title	十九世紀米国におけるロマンティック・ラブ・イデオロギーのヘゲモニーへの対立					
Sub Title	The resistance to the hegemonic status of the ideology of romantic love in nineteenth-century America					
Author	Notter, David					
Publisher	慶應義塾大学					
Publication year	2018					
Jtitle	学事振興資金研究成果実績報告書 (2017.)					
JaLC DOI	- ************************************					
Notes	2017年4月1日〜2018年3月31日の期間に、「19世紀米国におけるロマンティック・ラブ・イデオロギーへの対立」というテーマについての研究を行ってきた。ロマンティック・ラブ・イデオロギーへの対立」というテーマについての研究を行ってきた。ロマンティック・ラブ・イデオロキーというのは19世紀の前半に中産階級の中で定着し、一夫・婦制の理想にもとづいた「近代家族」の土台となるイデオロギーであった。しかし、シェーカーやモルモン教、またはオネイダ・コミュニティーを中心に、そのイデオロギーに対し反発し、それとは相容れない家族システムまたは親密性のパラダイムを提示する団体もあった。今回の研究では上記の団体を調べる上で、特にJ. H. Noyes(ノイズ)という人物が中心となっていたオネイダ・コミュニティーに焦点をあてることにした。日記などで明らかになったのは、ノイズは「愛」そのものに対して寛容であったものの、「ロマンティック・ラブ」というものに対してはひどく反対していた、ということである。「集団」というかたちをとって、コミュニティーの他のメンバーを「愛する」ことが歓迎されていたとは言え、二人だけの排他的なロマンスは破壊的なものとして捉えられていた。ノイズが提唱するアメーティブ・インタコースと呼ばれる性交の類は「愛情」を伴うものであったものの、「ロマンス」を表現するためのものではなく、そして興味深いのは、ノイズの19世紀におけるロマンティック・ラブの特徴がはっきりと描写されているということである。また、ノイズ自身がロマンスを否定しながらも、そのコミュニティーの一人の女性に対しかなり情熱的で、「ロマンティック・ラブの特徴がはっきりと描写されているということである。また、ノイズ自身がロマンスを否定しながらも、10つの仕ばらできる。最終的にノイズは合理性によって情熱をコントロールする必要性を唱えた。10つの仕ばらできるよりかにリースではできる。最終的にノイズは合理性によって情熱をコントロールする必要性を唱えた。10つの仕ばらできる。最終的にノイズは合理性によって情熱をコントロールする必要性を唱えた。10つの仕ばらできる。最終的にノイズは合理性によって情熱をコントロールする必要性を唱えた。10つのでは11 pt 10 pt 11 pt 10 pt 11 pt 11 pt 11 pt 12 pt 11 pt 12 pt 11 pt 12 pt 11 pt 12 pt 11 pt 11 pt 12 pt 11 pt 12 pt 11 pt 12 pt 11					
Genre	Research Paner					
	Research Paper					
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=2017000001-20170092					

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2017 年度 学事振興資金 (個人研究) 研究成果実績報告書

研究代表者	所属	経済学部	職名	教授	補助額	300 (/	A)千円
	氏名	ノッター デビッド	氏名 (英語)	David Notter		300 (A)	H) TD

研究課題 (日本語)

十九世紀米国におけるロマンティック・ラブ・イデオロギーのヘゲモニーへの対立

研究課題 (英訳)

The resistance to the hegemonic status of the ideology of romantic love in nineteenth-century America

1. 研究成果実績の概要

2017 年4月1日~2018 年3月 31 日の期間に、「19 世紀米国におけるロマンティック・ラブ・イデオロギーへの対立」というテーマについての研究を行ってきた。ロマンティック・ラブ・イデオロギーというのは 19 世紀の前半に中産階級の中で定着し、それ以降家族形態としてヘゲモニーと呼ぶに価するステータスを獲得した、一夫一婦制の理想にもとづいた「近代家族」の土台となるイデオロギーであった。しかし、シェーカーやモルモン教、またはオネイダ・コミュニティーを中心に、そのイデオロギーに対し反発し、それとは相容れない家族システムまたは親密性のパラダイムを提示する団体もあった。今回の研究では上記の団体を調べる上で、特に J. H. Noyes (ノイズ)という人物が中心となっていたオネイダ・コミュニティーに焦点をあてることにした。日記などで明らかになったのは、ノイズは「愛」そのものに対して寛容であったものの、「ロマンティック・ラブ」というものに対してはひどく反対していた、ということである。「集団」というかたちをとって、コミュニティーの他のメンバーを「愛する」ことが歓迎されていたとは言え、二人だけの排他的なロマンスは破壊的なものとして捉えられていた。ノイズが提唱するアメーティブ・インタコースと呼ばれる性交の類は「愛情」を伴うものであったものの、「ロマンス」を表現するためのものではなく、そして興味深いのは、ノイズの19世紀におけるロマンティック・ラブや「ロマンス」というものに対する批判の記述のなかで、ロマンティック・ラブの特徴がはっきりと描写されているということである。また、ノイズ自身がロマンスを否定しながらも、そのコミュニティーの一人の女性に対しかなり情熱的で、「ロマンティック」としか言いようがない行動を示していたという事実に、二重基準の存在を伺うことができる。最終的にノイズは合理性によって情熱をコントロールする必要性を唱えた。

2. 研究成果実績の概要(英訳)

I conducted research on the theme of 'The resistance to the hegemonic status of the ideology of romantic love in nineteenth-century America' between April 1 of 2017 and March 31 of 2018. The ideology of romantic love began to exert enormous influence over the middle classes in the first half of the nineteenth century. This marks the time when the family form known as the 'modern family' attained hegemonic status within the middle class, and the ideology of romantic love became the cultural ideal behind the monogamous form of marriage that this type of family was based on. However, there were groups, notably the Mormons, the Shakers and the Oneida Community, who resisted this ideology and adhered to paradigms of intimacy that did not fit with the prevailing norms of intimacy and dyadic romantic love. In this research I focused on the Oneida Community, and in particular its leader, J. H. Noyes. From diaries and other documents, it is clear that while Noyes was not against 'love' per se, he was strongly opposed to 'romantic love'. The type of 'amative intercourse' that Noyes proposed did include 'affection', but not 'romance', and interestingly, Noyes's explanations of why he is against the ideology of romantic love provides us with accurate descriptions of the characteristics of this ideology as it existed at the time. Although he was clearly against romantic relations, he himself was involved with a woman in a relationship that can only be described as 'romantic' at its core. In the end, he espoused the necessity of using rationality to control one's passion.

3. 本研究課題に関する発表							
発表者氏名 (著者・講演者)	発表課題名 (著書名・演題)	発表学術誌名 (著書発行所・講演学会)	学術誌発行年月 (著書発行年月・講演年月)				